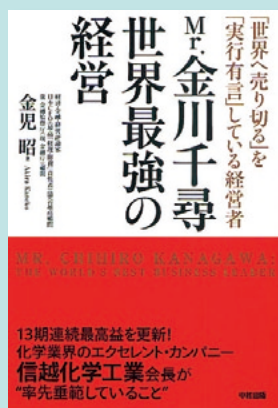


Mr. 金川千尋 世界最強の経営

発行：中経出版
著者：金児昭
定価：一、五七五円



良い会社とは、正道(フェアウェイ)を歩きながら
成長を続ける会社。

真正面から戦いながら、売上と利益をあげていく。

行天豊雄

日本CFO協会理事長

類まれな経営書

信越化学工業のCFOとして退任するまで、同社の経理部門で二八年勤めた金児昭さんが、同社の実力経営者金川千尋氏のその経営力について書き下ろしたのが本書である。

会社の経営者が自らの経営の軌跡を書き記した本は数多くあるが、本書は著者の金児さんが前書きで書いていくように、出版社からの依頼を受けて元の上司である金川千尋氏の経営について「誰にも話さず、相談せずに」書き下ろしたという。現役の経営者を元

を出している金児さんの著書は、どれも実体験に基づいた現場で体得したとばかりが書かれている。本書も、多くの経営書と比べて読みやすさとわかりやすさの点において傑出している。

経営の「正道」を行く

金川氏は、一九九〇年に社長に就任して以来、二期連続で最高益を更新し遂げてきた。リーマンショックを契機とした世界的な不況に見舞われた二〇〇九年三月期にいたって増益の記録は阻まれたものの、日本の優良企業が軒並み赤字転落となったなかで一、五四七億円の当期純利益を計上した。ムーデーズ格付けも「Aa3」と、世界の化学会社の中で圧倒的な優良企業に上り詰めた。まさに「世界最強」の経営者である。本書を読んで感じられるのは金川氏の「正道を行く、言うなれば基本に忠実な経営」である。

実体験に基づいた国際経営感覚

バブル経済が崩壊し「失われた二〇年」を過ぎようとしているが、この間日本にも資本市場のグローバル化を背景に米国型のコーポレートガバナンスの枠組みが相次いで導入された。株主至上主義を標榜して敵対的買収を仕掛ける投資ファンドや、透明性と説明責任を強く求める資本市場に対応すべ

く、日本企業の多くがさまざまな経営手法を取り入れて悪戦苦闘してきたわけである。その中で、金川氏の経営は「コンプライアンスを厳格に進め、利益を追求し、税金を納めるのが会社の使命」というだけあって極めてシンプルだ。流行の経営手法に表面的に惑わされることなく、経営の基本を貫いてきていることがわかるが、実はこれこそが最も難しいということは誰もが認めるところであろう。「社長が一番働かなければならない」と、自ら現場をリードしてきた金川氏の強靱な精神力あつてのものに違いない。

また一方で金川氏の経営は、優秀な人材を積極的に社外取締役や顧問に活用しているほか、「会社は株主のもの」と公言してIRには自ら注力するなど、欧米的な企業経営スタイルも率先して取り入れている。一九七〇年よりいち早く海外への事業展開の陣頭指揮をとってきた金川氏が、これまでの現場経験で培ったであろう国際経営感覚の奥の深さを感じさせてくれる。

本書には、日本企業が国際競争を勝ち残っていくのみならず、世の中を幸せにするという企業の目的を遂行していくためのヒントを見つけることができる。ぜひ多くの企業人に読んでいただきたい一冊である。